

近世大名家の葬送儀礼と社会

岩淵令治

Daimyo Funeral Customs and Society in Early Modern Japan

IWABUCHI Reiji

はじめに

① 初代藩主の葬儀

② 江戸死去の藩主の葬儀

おわりに

【論文要旨】

従来、大名家の葬儀に関する研究は、考古学による墓石・埋葬施設の検討か、文献史学による鳴物停止令という服喪の強制の検討が中心であった。しかし、周知のように、前近代社会においては、支配者の死は政権の継承の危機を意味した。先王の死と新王の就任は、公開のもと多くの演出によって執り行われ、政治秩序の維持・強化という機能を果たす場合が多かった。

江戸時代の武家の当主就任は、「家」の継承という形で主君から認められるから、新たな当主が民衆に継承の正当性を誇示する必要はない。また、形式上は、元来は当主が生きている間に家督を譲って家を継統する形をとることが必須であった。したがって、死んだ当主は隠居であり、すでに権力は持っていない。しかし、在位中の藩主が死去した場合、幕府に嫡子届が出されていても、服忌との関係で嫡子への相続はすぐには許されなかった。実態としていわば「王の不在」という状況が、最短でも五〇日前後続いたのが一般的だったのである。

そこで、本稿では、鳥取藩主の葬儀について、「王の不在」という状況下で執行された葬儀自体の機能を検討した。また、検討にあたっては、領地と江戸の葬儀を総合的にみることにとめた。それは、参勤交代によって、領地と家族・家臣団が江戸と国元に分断され、また政治的なレベル・血縁レベルとも大名家同士、そして幕府との関係が江戸に収斂していたからである。

検討の結果、大名家の葬儀も、儀礼に参加する機会を設けることで、藩士のみならず領民の意識をも統合していく政治的・社会的な機能を持ったこと、また国元の葬儀とならんで、江戸での葬儀も家族・親類・縁類の弔い、武家社会の交際、幕府・藩主の継嗣問題、といった点で大きな意味を持ったことが明らかになった。とくに藩主在位中の死去の場合、その葬儀は藩主不在の下で新当主（藩主）が最初に主催する行事であり、いわば代替り儀礼の意味を持ったのである。

【キーワード】 大名家、葬儀、江戸菩提寺、代替り儀礼、大名社会